

海　断片

梶井基次郎

青空文庫

……らすほどそのなかから赤や青や朽葉^{くちば}の色が湧いて来る。今にもその岸にある温泉や港町がメダイヨンのなかに彫り込まれた風景のように見えて来るのじやないかと思うくらいだ。海の静かさは山から来る。町の後ろの山へ廻つた陽がその影を徐々に海へ拡げてゆく。町も磯も今は休息のなかにある。その色はだんだん遠く海を染め分けてゆく。沖へ出てゆく漁船がその影の領分のなから、日向のなかへ出て行くのをじつと待つてているのも楽しみなものだ。オレンジの混つた弱い日光がさつと船を漁師を染める。見ている自分もほーっと染まる。

「そんな病弱な、サナトリウム臭い風景なんて、俺は大嫌いなんだ」

「雲とともに変わつて行く海の色を褒めた人もある。海の上を行き来する雲を一日眺めているのもいいじゃないか。また僕は君が一度こんなことを言つたのを覚えているが、そういう空想を楽しむ気持も今の君にはないのかい。君は言つた。わずか数浬カイリの遠さに過ぎない水平線を見て、『空と海とのたゆたいに』などと言つて縹渺ひようびょうとした無限感を起こしてしまったんぞはコロンブス以前だ。われわれが海を愛し空想を愛するというなら一切はその水平線の彼方かなたにある。水平線を境としてそのあちら側へ滑り下りてゆく球面からほんとうに美しい海ははじまるんだ。君は言つたね。

布畦^{ハウイ}が見える。印度洋^{インド}が見える。月光に洗われたベンガル湾が見える。現在眼の前の海なんてものはそれに比べたらラフな素材にしか過ぎない。ただ地図を見てではこんな空想は浮かばないから、必要欠くべからざるという功績だけはあるが……多分そんな趣旨だつたね。ご高説だつたが……

「——君は僕の気を悪くしようと思つてているのか。そう言えば君の顔は僕が毎晩夢のなかで大声をあげて追払うえびす三郎に似ている。そういう俗惡な精神になるのは止し給^{たま}え。

僕の思つている海はそんな海じやないんだ。そんな既に結核に冒されてしまつたような風景でもなければ、思いあがつた詩人めかした海でもない。おそらくこれは近年僕の最も眞面目になつた

瞬間だ。よく聞いてくれたま給え。

それは実に明るい、快活な、生き生きした海なんだ。未だかつて疲労にも憂愁にも汚されたことのない純粹に明色の海なんだ。遊覧客や病人の眼に触れ過ぎて甘ったるいポートワインのようになつてしまつた海ではない。酔っぱくつて渋くつて泡の立つ葡萄酒のようだ、コクの強い、野蕃な海なんだ。波のしぶきが降つて来る。腹を刺さるような海藻の匂いがする。そのツツツツした空気、野獸のような匂い、大氣へというよりも海へ射し込んで来るような明らかな光線——ああ今僕はどうてい落ちついてそれらのことを語ることができない。何故といって、そのヴィジョンはいつも僕を悩ましながら、ごく稀なまつたく思いもつかない瞬間にしか

顕われて来ないんだから。それは岩のような現実が突然に劈開へきかいしてその劈開面をチラツと見せてくれるような瞬間だ。

そういうようなものを今僕がどうして精密に描き出すことができよう。だから僕は今しばらくその海の由来を君に話すことにしてよう。そこは僕達の家がほんのしばらくの間だけれども住んでいた土地なんだ。

そこは有名な暗礁や島の多いところだ。その島の小学児童は毎朝勢揃いして一艘の船を仕立てて港の小学校へやつて来る。帰りにも待ち合わせてその船に乗つて帰る。彼らは雨にも風にもめげずにやつて来る。一番近い島でも十八町ある。いつたいそんな島で育つたらどんなだろう。島の人というとどこか風俗にも違つた

ところがあつた。女人人が時々家へも来ることがあつたが、その人は着物の着つぶしたのや端^はぎれを持つて帰るのだ。そのかわりそんなきれを鼻緒に巻いた藁草履やわかめなどを置いて行つてくれる。ぐみややまももの枝なりをもらつたこともあつた。しかし、その女人人はなによりも色濃い島の雰囲気を持つて來た。僕たちはいつも強い好奇心で、その人の謙遜な身なりを嗅ぎ、その人の謙遜な話に聞き惚れた。しかしそんなに思つていても僕達は一度も島へ行つたことがなかつた。ある年の夏その島の一つに赤痢^{はや}が流行つたことがあつた。近くの島だつたので病人を入れるバラツクの建つのがこちらからよく見えた。いつもなにかを燃している、その火が夜は氣味悪く物凄かつた。海で泳ぐものは一人もない。

波の間に枕などが浮いていると恐ろしいもののような気がした。

その島には井戸が一つしかなかつた。

暗礁については一度こんなことがあつた。ある年の秋、ある晩、夜のひき明けにかけてひどい暴風雨があつた。明方物凄い雨風の音のなかにけたたましい鉄工所の非常汽笛が鳴り響いた。そのときの悲壮な気持を僕は今もよく覚えている。家は騒ぎ出した。人が飛んで来た。港の入口の暗礁へ一隻の駆逐艦くちくかんが打つかつて沈んでしまつたのだ。鉄工所の人は小さなランチへ波の凌しおのぎに長い竹竿を用意して荒天のなかを救助に向かつた。しかし現場へ行つて見ても小さなランチは波に揉まれるばかりで結局かえつて邪魔あまをしに行つたようなことになつてしまつた。働いたのは島の海女

で、激浪のなかを潜つては屍体を引き揚げ、大きな焚火たきびを焚たいてそばで冷え凍えた水兵の身体を自分らの肌で温めたのだ。大部分の水兵は溺死した。その溺死体の爪は残酷なことにはみな剥はがれていたという。

それは岩へ搔きついては波に持つてゆかれた恐ろしい努力を語るものだつた。

暗礁に乗りあげた駆逐艦の残骸は、山へあがつて見ると干潮時の遠い沖合に姿を現わしていることがあつた。

青空文庫情報

底本：「檸檬・ある心の風景 他二十編」旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

※「最後の三行は「下書き」と思われる別稿から、編集部の判断で挿入した。」の記載が、本文末にあります。

※編集部による傍注は省略しました。

入力:j.utiyama

校正:Juki

1998年12月14日公開

2016年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

海 斷片

梶井基次郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>